

〈論文〉

# 「反知性主義」の概念分析 知の運用へのまなざしの一考察

新井 理志

1. 研究の背景と目的
  - 1- 1. 問題の所在：なぜ知の運用に向けられるまなざしに着目するのか
  - 1- 2. 先行研究：知の運用に向けられるまなざしは、どのように検討されてきたのか
  - 1- 3. 事例選択と研究の問い：本研究は何を分析の対象とし、どのような問いにこたえるのか
2. 研究の方法
  - 2- 1. 研究方法の概要：本研究の採用する概念分析とは何か
  - 2- 2. 本研究が分析対象とする資料と分析の構成
3. 分析1：「反知性主義」概念の用法を枠付けた主要論者の用法
  - 3- 1. 斎藤環の用法
  - 3- 2. 佐藤優の用法
4. 分析2：「反知性主義」の定着にみられる特徴的な用法
  - 4- 1. 「反知性主義」の枕詞的使用により社会の風潮を理解する用法
  - 4- 2. 「反知性主義」を知への「蔑視」として理解する用法
  - 4- 3. 「反知性主義」を他者との「対話」を阻害する傾向として理解する用法
  - 4- 4. 「反知性主義」を用いた批判に対して再批判する用法
5. 結論
  - 5- 1. 各章の分析の整理
  - 5- 2. 本研究の分析から得られる示唆

参考文献

参考資料

## 1. 研究の背景と目的

- 1- 1. 問題の所在：なぜ知の運用に向けられるまなざしに着目するのか

近年、知<sup>1</sup>の運用の方法に対する問題提起が注目されている。代表的なものは、世

---

1 本論文で主題化している知とは、情報、知識、知見、知恵、教養といった「知る」という

論形成において客観的事実より個人の信念や感情が重視されていることを「ポスト・トゥルース」(McIntyre 訳書, 2018) 概念により提起するものである。アメリカ発のこの概念は、ソーシャルメディアに偽情報や誤情報を流すことで大きく世論が操作されている事態に警鐘を鳴らすものである。この概念は、世論形成において客観的事実よりも個人の信念や感情が重視されている、という事態への問題提起として広く使われ、オクスフォード英英辞典の2016年の「今年の言葉」にも選ばれた(OxfordLanguages 2016)。同様の関心に基づく問題提起は、「フィルターバブル」(Sunstein 訳書, 2003)「エコー・チェンバー」(Paliser 訳書, 2012)といった概念を用いて以前から行われてきた。この問題提起は、メディア空間としてのソーシャルメディア、メディア空間に顕在化する社会の分断、それらを利用して加速するポピュリズム政治、という複数の問題系(大石 2019)を結びつけ、多くの研究関心を引き寄せてきた。

そして、上記の研究関心に基づいた研究は、主に社会情報学、メディア論において取り組まれてきている(例えば、(木村 2020))。具体的には、本当に「ポスト・トゥルース」概念により提起された現象は人々の行動に表れているのか、またそれはなぜ起こっているのか、を検証する研究群である。この研究群は、メディアと情報をめぐる理論を精緻化するうえでも、より緻密に社会を理解するうえでも重要なものである。しかし、ここで提起されている状況を理解するためには、知の運用に対してどのようなまなざしが向けられているのか、という点を検討することも同時に重要である。この観点を欠いては、人々の知の運用の方法を対象にした上記のような研究成果が、「望ましくない知の運用をしている人々」に対する過剰な非難に用いられ、問題の解決から遠ざかってしまう可能性もある。そこで本研究では、知の運用に向けられるまなざしがいかなるものか、を問題とする。

## 1-2. 先行研究：知の運用に向けられるまなざしは、どのように検討されてきたのか

知の運用に向けられるまなざしを対象とする研究は非常に数少ない。そのわずかな

---

行為の対象や帰結として存在するであろうものの総称として用いている。これらの概念に差異は当然存在するが、語られ方において明確に分類する必要があるほどの差異は存在しないため、ひとまずこれらの性質を持つものとして共通性を仮定している。本研究は論題の通り「反知性主義」に着目する以上、知のなかでは特に「知性」という概念に着目することになる。

先行研究は、**知の運用に向けられるまなざしを文化的な側面から検討**してきた。本節ではそれらを取り上げたくうえで、本研究の学術的な位置付けを示す。

知の運用をめぐる文化を対象とした研究の筆頭は、**教養主義を対象とした研究群**である。教養主義とは、総合雑誌や人文系の古典を中心とした書籍の講読を通じた人格の陶冶を規範とする文化である。教養主義は大正時代に勃興し、高校生や大学生の規範文化として成立し、戦後には大学の大衆化の進展に伴い大衆にも拡大していった。この文化は、学校的教養でもある西欧文化の取得を通じた文化的、階級的な成り上がりや、大衆文化・農村文化からの誇りある差異化としての意味を持っていた（竹内 2003）。教養主義のルーツは近代日本の大衆文化の中核にあった**修養主義**<sup>2</sup>であり、教養主義はそこからの離脱とエリート文化化により成立したという（筒井 2009）。また、教養主義は「勤労青年」を主な担い手とする大衆教養文化にも支えられていたという（福間 2017）。これらの研究群は知の運用に向けられるまなざしの一側面を、同時代の文化の性質と結びつけて明らかにしたものと見える。しかしこの研究群の対象は、**教養主義が勃興した大正時代から衰退したとされる 1960 年代後半頃**<sup>3</sup>までに限定されており、その後の知の運用をめぐる文化の諸相については射程に含めていない。

**1970 年代以後の知の運用をめぐる文化を対象とした研究の筆頭は、自己啓発言説を取りあげた牧野（2012, 2015）の研究と、サラリーマン文化を取り上げた谷原（2020a, b）の研究**である。牧野（2012, 2015）によれば、教養主義の中核にあった人文知の信仰は、「実務インテリ」や「『設計型』知識人」を称揚する議論によって社会科学的知の信仰へと変化したという。その後、様々な知の参照形式への変遷を経て、1990 年代から 2000 年代にベストセラー、ビジネス誌、女性誌において、**自己の内面を技術・スキルの習得により統制しようとする志向に帰結した**という。そこで自己の内面への技術による統制の手段を提供したのが、心理学者やコンサルタントなどを中心とする「心の専門家」の人々であるという。サラリーマン文化を対象にした谷原（2020a, b）の研究でも、異なるアプローチではあるが同年代における通俗的な心理学知の参照が指摘されている。谷原によれば、教養主義の衰退以降の中間層のサラリーマン文化においては、職場での出世に有用な処世術などの即物的な知が求められるようになったという。そのような知の根拠として用いられたのが、通俗的な心理学

2 修養主義とは、「人格の完成」を目的に不断の努力を積み重ねることを規範とする考え方で、近代日本の大衆文化の中核を占めた考え方であるという（筒井 2009）。

3 この衰退は、高度経済成長と都市社会化、消費文化の広がりといった社会状況を背景に、大学紛争、全共闘運動が生み出した教養知識人に対する糾弾と失望が相まったことで引き起こされたという（竹内 2003）。

知である。心理学知をベースに仕事のスキル向上を志向する知の参照形式は、中間層のサラリーマン文化から牧野が対象としていたようなエリート層の文化へと拡大したという。この牧野、谷原の研究では、「知の運用がどのように変化していったのか」に焦点を当て、知の運用をめぐる文化が知の運用をどのように規定していったのかが分析されている。そのため、「知の運用にどのようなまなざしが向けられていたのか」という点は分析の焦点から外れ、検討が深められていない。また牧野、谷原の研究では、分析の対象が知の運用のなかでも特に自己に関するもの限定されており、自己以外の政治的、社会的な事象における知の運用については射程に含まれていない。

本研究では、知の運用に向けられるまなざしについて先行研究の検討が不十分な1970年代以降において、特に2010年代以降にみられる知の運用へのまなざしを取り上げる。これは、本論文の冒頭で言及したように2010年代以降に注目が高まった知の運用に対して、どのようなまなざしが向けられているのかを検討するためである。そして、2010年代以降に見られた知の運用への問題提起が政治的・社会的な事象に対するものであったことをふまえ、本研究では政治的・社会的な事象における知の運用がどのようなまなざしに向けられているのか、に焦点を当てて検討を行う。

### 1-3. 事例選択と研究の問い：本研究は何を分析の対象とし、どのような問いにこたえるのか

本研究は知の運用へのまなざしの一側面を浮き彫りにするために、「反知性主義」概念の用法を分析の対象に据える。本節では、本研究が対象とする「反知性主義」概念とはどのようなものか、本研究はなぜ「反知性主義」概念の用法を対象として選択するのか、本研究はどのような問いに取り組むのか、を順に記していく。

#### (1) 本研究が対象とする「反知性主義」概念とはどのようなものか

「反知性主義」とは、アメリカにおいて知識人に反発する社会的傾向を叙述するために、アメリカの歴史学者のホフスタッターが生み出した概念である（Hofstadter 1963=2003）。ホフスタッターによれば、アメリカ社会の文化的な特徴として、知性や知的な生き方に対する疑念や憤りという「反知性主義」があり、アメリカ社会の知性や文化を脅かしてきたという。ただし、「反知性主義」に陥る者は知識人に根深い不信感だけでなく、啓蒙や文化に対する心からの憧れを併せ持っているという。そし

て、このような知識人の関心事に対する顕著な敵意は、平等主義<sup>4</sup>といういわば「善意の衝動」と結びついて存在しているという。そこでホフスタッターは、平等主義という「善意の衝動」を傷つけない形で「反知性主義」を抑制することが必要であると主張している。

この「反知性主義」概念は複数の論者によって日本に導入され、2010年代には日本のメディアにおいても盛んに用いられるようになった。「反知性主義」概念は、新聞報道や雑誌記事において2015年に最も頻繁に用いられたが、それ以後も知の運用の方法が問題とされる事例が報道などで話題になると、それを形容する語彙として用いられ続けている。その主な用法は、社会状況や政治的事象に対して、そこで行われている知の運用が望ましくないものだとして批判するものである。例えば、「反知性主義が跋扈した結果、国家中枢を掌握」しているとして警鐘を鳴らしたり（笠井・白井 2014, p.28）、「反知性主義の風潮もある中、『教養はそうそう簡単に負けない』の思いを共有する編集者たちが、昨年（筆者注：文庫本フェアを）始めて好評を博した」（『読売新聞』2015.12.20 朝刊）と、社会の風潮を批判的に描写したり、といった用法がみられる。

## （2）本研究はなぜ「反知性主義」概念の用法を対象とするのか

この「反知性主義」概念の用法を分析対象とする理由は、以下の2点である。

1点目の理由は、「反知性主義」概念が主に2010年代以降の政治的・社会的事象における知の運用を対象に用いられていることである。まさに本研究が問題とする領域に対して、知の運用へのまなざしを形作る用法がみられるため、本研究の課題に取り組むうえでは格好の素材である。

2点目の理由は、「反知性主義」概念が、知の運用の方法に対して批判する用法により用いられやすく、その用法のなかで知の運用に対するまなざしの姿に迫ることができることである。ある知の運用に対して肯定的に捉えているのであれば、わざわざそれになぜ賛同できるかを説明する必然性は薄い。一方で、ある知の運用に対して批判的に言及する場合は、なぜその知の運用が良くないのかを説明する必然性が高まる。したがって、知の運用に対して批判する用法が用いられやすい「反知性主義」概念を対象にすることにより、知の運用に対するまなざしを明確に浮き彫りにすることができる。

4 この平等主義とは、プロテスタントにおける福音主義と結びついた、「神の前では誰もが平等であるべき」というラディカルな平等主義であり、反権威主義とも結びついて存在していたという（森本 2015）。



### (3) 本研究はどのような問いに取り組むのか

これまで述べてきたように、本研究は知の運用がどのようなまなぎしを向けられているのか、ということに問題関心を据える。そしてそのまなぎしのなかでも特に、2010年代以降の政治的・社会的事象における知の運用へのまなぎしに照準する。そのため、2010年代以降の政治的・社会的事象における知の運用に批判的に言及する「反知性主義」概念の用法に着目する。そこで本研究では、取り組むリサーチクエスチョンを「『反知性主義』概念を用いることで、政治的・社会的事象における知の運用がどのように捉えられているのか」と設定する。「反知性主義」概念の用法に着目することで、知の運用に向けられるまなぎしの一側面を考察することが本研究の目的である。

## 2. 研究の方法

### 2-1. 研究方法の概要：本研究の採用する概念分析とは何か

本研究では、「反知性主義」概念の用法から見出される知の運用へのまなぎしに照準するため、概念分析（酒井ほか編 2009, 2016）という方法論を用いる。概念分析とは、日常の社会生活のなかで概念がどのような形で用いられているか、つまりは概念の用法を明らかにすることを目的とした方法論である。本節ではこれ以降、概念分析における概念とは何か、概念の用法とは何か、概念の用法をどのような方法で明らかにするのか、の3点について順を追って説明していく。

#### (1) 概念分析における概念とは何か

概念分析では、概念の意味内容に着目するのではなく、概念が「物事を捉え、成し遂げる」（酒井ほか編 2016, p. iv）ことに用いられる側面に着目して分析を行う。私たちは日常生活において、自分や他者の行為の意味を、言葉を用いて理解している。例えば、刃物を台所で持つという行為において、「持っている刃物は包丁」であり、「食材を切る」ために持っているといえられる。一方、包丁で食材以外のものを切る行為や、台所以外の場所で刃物をただ持っているという行為は、意味のわからない逸脱行為として捉えられるだろう。これは刃物ではなく（とは区別して）包丁という言葉を用いて行為の意味を理解している、ということである。つまり、包丁という概念は、料理において食材を切るという行為のやり方の理解に用いられるものである。概念分析では、言葉が持つこのような性質に着目して分析の対象とすることを、言葉や語彙ではなく概念という語を用いることで明示する（西阪 2001）。

## (2) 概念分析が分析の対象とする概念の用法とは何か

概念はそれぞれ、特定の用いられ方を持ちあわせている。包丁という概念による行為の理解の仕方をあえて言葉にすると、「(包丁は) 料理をする際に台所で食材を切るために用いる」という形になるだろう。つまり、包丁という概念は、「料理」「台所」「食材」「切る」という他の概念を用いることにより理解されている。そして、実際の行為を理解する場面において、「あの人は包丁さばきがこなれている」という捉え方は、実際にその人が台所で包丁を用いて食材を切るさまを見て生じるものである。ここにおいても、「包丁」という概念は「台所」「食材」「切る」といった概念と結びつくことで理解され、用いられている。

そして、概念同士には特定の結びつき方が存在している。「台所」は包丁を使う場所ではあっても包丁で切るものではあり得ない。「料理」は包丁を使う行為が包含される一連の行為の名称であって、包丁を使う場所ではない。このように、概念同士は特定の結びつき方により用いられるものであり、これを概念の用法と呼ぶ。概念の用法の分析を目的とする概念分析は、実践者が具体的に行為を行う方法論についての知識の記述を目指す点で、エスノメソドロジーの考え方に基づいている(前田ほか編 2007, 西阪 2001)。概念の用法は私たちが当たり前用いていて意識されないものであり、それを「呼び起こす」営みが概念分析である。

概念の用法は、それぞれの個人が個別に異なるものとして持っているのではなく、社会のなかで一定の共通性を持って共有されている(前田ほか編 2007)。概念の用法が社会のなかで共有されていることではじめて、私たちは概念を用いて他者の行為を理解することができる。包丁の使い方を社会の成員が共通の方法で理解していることで、包丁を用いて食材を切る行為の理解が可能になるのである。概念の用法は人々の間で共通して用いられる公的性質を持ち、だからこそ研究者にも日常の生活者と同じ方法により観察可能なものでもある。

概念の用法は、それ自体が規範的な性質を伴っていることも分析上重要である。包丁の例を用いて説明すると、「包丁で食材を切る」という用法は、「包丁で食材以外のものを切るべきではない」という規範的な含意があり、それ自体が公的な規則としての性質を持つ。そのような性質があるからこそ私たちは、「包丁で食材以外のものを切る」という行為を逸脱行為であると捉えられるのである。つまり、概念の用法は私たちが運用する規範を成り立たせている側面もある。

ここまで説明してきたような概念の用法が、いかなる形で存在しているのかを明らかにするのが概念分析である。

### (3) 概念の用法をどのように明らかにするのか

概念の用法は、社会生活で概念を用いて行為をしたり行為を理解したりする具体的な日常の実践のなかに、自ずと立ち現れるものである(間山 2002)。言い換えれば、概念の用法やそれに伴って存在する規範は、その概念が用いられる具体的な文脈において観察可能である。具体的には、「料理苦手すぎて、この前包丁で指切っちゃった」という発言においては、包丁は料理において使うものであり、料理の上手い人は問題なく使えるものであり、指を切るものではない、という包丁概念の用法が観察できる。このように、概念分析では概念の用法を、実際の概念の使用場面を取り上げながら、その文脈とともに記述する形で明らかにする(酒井ほか編 2016)。

#### 2-2. 本研究が分析対象とする資料と分析の構成

「反知性主義」概念は学問的文脈のもとで導入され、大衆的メディアにまで広がったため、それぞれの段階において用法に差異が存在する。その差異を反映させる形で、本研究は分析章を2つに区分している。第3章は、「反知性主義」概念の用法を広めて定着させた主要な用法を対象とし、「反知性主義」概念の用法がどのような用法により枠付けられたのかをみていく。第4章では、「反知性主義」概念の定着のなかで特徴的にみられる用法を取り上げ、その性質を分析する。

本研究では、雑誌、新聞、書籍のテキスト<sup>5</sup>のなかで、具体的に「反知性主義」概念が用いられている部分を資料として使用する。「反知性主義」概念を提起したとされるアメリカの歴史学者のホフスタッターの著作『アメリカの反知性主義』が2003年に邦訳された後も、しばらくの間は「反知性主義」概念がメディアにおいて注目されることはなかった。「反知性主義」概念が広くメディアで使われ始めた初期(2013～2014年)において、「反知性主義」概念を用いた議論を積極的に展開し、後の「反知性主義」言説への足掛かりを作った論者は限られている。第3章の分析資料は、そのような「反知性主義」概念の広がり大きな役割を果たした2人の論者(斎藤環、佐藤優)が執筆した書籍である。第4章の分析資料は、「反知性主義」概念の定着においてみられる用法が明確に観察可能な新聞記事や雑誌記事である。

雑誌、新聞、書籍のような大衆的なメディアにおいて産出されるテキストは、不特定多数の人々に読まれる、つまりは理解されることを想定されて作られているため、それ自体が相互作用的な言説実践である(西阪 1996)。そのようなテキストに現れる

---

5 テキストという概念も多義的なものだが、本論文では「書かれたもの」を表す語彙として使用する。



概念の用法を解明することは、同様の概念を用いてテキスト、ひいては社会生活の行為、実践を理解する方法論を解明することでもある（酒井 2010）。

概念分析は、何らかの経験的な命題を証明する性質の方法論ではなく、経験に先立ち経験を成り立たせるために必要な概念の用法を明らかにすることを目的とした方法論である。言説空間の全体性を前提とする方法論ではないため、選択する事例が全体を代表しているのかどうかは問題にはならない。取り扱うテキストがどのような意味を持つものとして、どのような形式で成立しているのか、が重要である（間山 2002）。

### 3. 分析 1：「反知性主義」概念の用法を枠付けた主要論者の用法

本研究では、「反知性主義」概念を用いた議論をメディア上で展開し、「反知性主義」概念の定着の契機を作ったと考えられる齋藤環、佐藤優の2名の論者の用法を取り上げる。3-1、3-2においてそれぞれ齋藤、佐藤が「反知性主義」概念を用いて知の運用をどのように捉えていたのかを検討する。

#### 3-1. 齋藤環の用法

齋藤は日本の国民の特質を「ヤンキー性」<sup>6</sup>をキーワードに論じており、その論旨の根幹において、「反知性主義」概念を用いている。不良や非行少年に特有の文化と思われていた「ヤンキー性」が世間一般に広く浸透していることを看破し、その理由を分析しようとするのが齋藤の議論である（齋藤 2012, 2014）。その主張は、2012年の著書『世界が土曜の夜の夢なら ヤンキーと精神分析』、2014年の著書『ヤンキー化する日本』という2冊の著作において顕著に示されているため、本節ではこの2冊の著作を取り上げる。

本節では、齋藤の「ヤンキー」論において「反知性主義」概念が用いられる場面をみていく。以下の部分では「ヤンキー先生」として知られる義家弘介氏の教育論、そして同じく「ヤンキー的」とであると齋藤が形容する「金八先生」の教育論を取り上げながら、その内に存在する「反知性主義」が指摘されている。

（筆者注：「ヤンキー先生」が教育において重視する）原点、直球、愛、信頼<sup>7</sup>。い

6 齋藤のいう「ヤンキー性」とは、バッドセンスな装いや美学、「気合い」や「絆」という理念のもと、家族や仲間を大切にするという倫理観が一体となって成立した文化である。

7 「原点、直球、愛、信頼」とは、「ヤンキー先生」が主著『ヤンキー母校に生きる』にて提

ずれも文句のつけようがない言葉だし、僕もこうした主張に部分的には賛成だ。ただ、この種のプリミティブな情緒を重視する発想は、しばしば極端な反知性主義に走ってしまう危険性がある。たとえば義家は次のように述べてもいるのだ。「教育は学問ではない。公式に則ってさえいけば答えが出るなんていう単純なものではないし、熟考したからと言って大切に思う者を導けるわけでもない」(『ヤンキー母校に生きる』)

反知性主義のまずい点は、「情を欠いた教育」批判が高じて、子供に対する理論的・知的な理解を一切否認するところまで暴走してしまいかねない点である。案の定、さきの教育理論の否定にとどまらず、彼の批判はカウンセラーや医療にまでおよぶ。(斎藤 2012, pp. 136-7)

この種の(筆者注:ヤンキー的)リアリズム<sup>8</sup>を構成する要素のうち最も重要なものは、体当たりの行動主義だ。それはしばしば、過度に情緒的であるがゆえに反知性主義と結びついて、一層無鉄砲な行動に向かわせがちである。彼らは——ある種のタテマエとしてかもしれないが——殊更に理論や検討を無視する。あるいは軽視というパフォーマンスをこれ見よがしにして見せる。(中略)

金八先生の方法論もまた、ヤンキー先生同様、基本的には体当たり主義である。その原点にあるのは、生徒に対する直球の愛であり信頼だ。しかし、皮肉な見方をすれば、いかなる問題も愛と信頼によって解決できるというファンタジー作品でもあり、ここにも反知性主義のかおりが濃厚に漂っている。(斎藤 2012, pp. 147-8)

この資料において斎藤は、「ヤンキー先生」や金八先生の「体当たり主義的」な教育論について、「極端な反知性主義」に「走ってしまう」、「子供に対する理論的、知的な理解」を「一切否認」するところまで「暴走」しかねない、と指摘している<sup>9</sup>。そして、このような「反知性主義」は、生徒への「愛」や「信頼」といった「情」に欠けた教育批判が高じたものであるという。ここでは、教育における過度な「情」「情緒」の重視と「反知性主義」が結びついて捉えられている。そして、「反知性主義」

唱していた教育論にて大切とされていたキーワードとして、斎藤が提示したものである。

- 8 斎藤によれば「この種のリアリズム」とは「ヤンキー的リアリズム」のことで、アツきと気合によりやれる限りの行動をしてみろという、感性に基づく行動主義によって特徴付けられるという。
- 9 「反知性主義」は、斎藤によればこれらの作品を通じて「世間」に「浸透」したという。

の危険性を、「理論的・知的な理解」の「否認」、「理論や検討」の「無視」に見出し、その結果「無鉄砲」な行動に帰結するという形で捉えている。この捉え方は、教育論という文脈とも結びつき、理論を軽視せず参照するべきであるという規範を前提に成立している。そして、「反知性主義 自体が危険なものであるという前提のもとで、「反知性主義」概念が教育論における理論や知的な理解の過度な軽視を批判することに用いられている。

### 3-2. 佐藤優の用法

佐藤は、「反知性主義」について雑誌や新聞において数多く言及している論者であり、特に政治的状況の批判に「反知性主義」概念を用いていることが特徴である。本節では佐藤による「反知性主義」概念の用法が最も明確に読み取れる2015年の著作『知性とは何か』を取り上げる。その構成は大まかに「『反知性主義』とは何か→『反知性主義』に対抗する知性とは何か→どうすれば『反知性主義』を克服できるか」という流れになっており、「反知性主義」概念が論旨の鍵となっている。

以下の部分では、佐藤が「反知性主義」概念をどのような用法により用いているのが現れている。

ここで筆者（筆者注：佐藤のこと）が言う反知性主義とは、実証性と客観性を軽視もしくは無視して、自分が欲するように世界を理解する態度を指す。（中略）反知性主義は、知的エリートの政治に対する批判原理としては、民主的機能を果たすことがあるが、反知性主義者が権力を掌握した場合、大多数の国民に不幸をもたらすと筆者は考える。（佐藤2015, pp. 4-5）

新しい知識や見識、論理性、他者との関係性などを等身大に見つめる努力をしながら世界を理解していくという作業を拒み、自分の都合の良い物語の殻に籠もる<sup>10</sup>ところに反知性主義者の特徴がある。合理的、客観的、実証的な討論を反知性主義者は拒否する。

もっとも、反知性主義者が、自分の物語に閉じ籠っているだけならば、他者に危害は加えないが、政治エリートに反知性主義者がいると、国内政治、国際政

10 佐藤は、「反知性主義者」の「自分の都合の良い物語の殻に籠もる」性質について、「閉ざされた世界観の中で自己充足」しているため、「本質において、対話が不可能」（佐藤2015, p.146）であるとも記述している。

治の両面でたいへんな悪影響を与え、日本の国益を毀損することになる。(佐藤 2015, p.16)

この資料ではまず「実証性と客観性を軽視もしくは無視して、自分が欲するように世界を理解する態度」という形で佐藤による「反知性主義」の定義が示されている。この定義は、「実証性」、「客観性」の軽視、無視と、「自分が欲するように世界を理解」する態度という2つの構成要素からなる。「合理的、客観的、実証的」に討論することと、「自分の都合の良い物語」に閉じこもることが対比され、この点において上記の「反知性主義」2つの要素が結びついている。

そして、「反知性主義者」が「政治エリート」として「権力を掌握」した場合に、「大多数の国民」に「不幸」、「たいへんな悪影響」があり、「国益が毀損」されるといふ。ここでは、「反知性主義者」が「(政治)権力」を握ることで、「国」とそこに住む「国民」に大きな危険性がもたらされる、と捉えられている。「反知性主義者」が「自分の物語」に閉じこもっていることに関しては問題ないと捉えていることから、「反知性主義者」が「権力」を握ることによる他者への影響力の大きさを問題視していることがわかる。「政治エリート」は「合理的、客観的、実証的」な討論を行うべきという規範を前提に、「反知性主義者」が「政治エリート」となることに警鐘を鳴らしている。「反知性主義」概念は、実証的、客観的な討論を行わない性質として捉えられ、客観的な討論を行っていないとみられる政治エリート、権力者の批判に用いられている。

#### 4. 分析2：「反知性主義」の定着にみられる特徴的な用法

本節では、「反知性主義」概念が広まり定着していった際に、「反知性主義」概念がどのように用いられていったのか、その特徴的な用法を取り上げ分析する。なお、第3章で検討した用法が用いられなくなったわけではなく、佐藤や斎藤はもちろんそれ以外の論者やその読者と考えられる一般の人々も、第3章で取り上げたような用法で「反知性主義」概念を用いている。しかし、第3章で取り上げた用法のみが用いられているわけではなく、いくつかの用法へと広がりを見せている。本論文ではその形式のなかで特に顕著に用いられている4つの用法がみてとれる雑誌・新聞記事を対象に、その用法を考察する。

#### 4-1. 「反知性主義」の枕詞的使用により社会の風潮を理解する用法

本節では「反知性主義」概念を枕詞的に用いて「社会の風潮」を簡潔に形容し理解を打ち止めする用法を取りあげる。

教養文庫シリーズを持つ6社による文庫本フェア「不屈の教養！フェア」が全国約450の書店が参加して始まった。反知性主義の風潮もある中、「教養はそうそう簡単に負けない」の思いを共有する編集者たちが、昨年始めて好評を博した。（『読売新聞』2015.12.20 朝刊）

■知の楽しみ 2月の「100分de名著」（月曜、Eテレ）は「大衆の反逆」。この書の価値をわかりやすく解説。個人としての意思を持たず多数の他者に流され「大衆」となることの危険が語られる。（中略）ポピュリズムや反知性主義が台頭する今、柔らかな反骨精神を持つ内容をとてもうれしく思う。（福島市・中村晋・高校教諭・51歳）（『朝日新聞』2019.2.19 朝刊）

これらの資料はどちらも、現在の社会の風潮を「反知性主義」が広まる危険な状況であると捉えている。そして、このような社会状況の認識を基に、話者の捉える望ましい「教養」「読書」の姿といった「知性的」な議論へと接続している。ここでは、「反知性主義」が社会に広まることを望ましくないとする規範が前提となっている。そして、「反知性主義」の詳しい内実や、「反知性主義」が社会に広まることを危惧すべき理由を説明しないかたちで用いられていることもみてとれる。つまり、ここでは「反知性主義」概念を社会の風潮や状況に対して枕詞のように用いることで、知の運用の方法が危うい社会的状況であると理解し、それ以上の社会の理解が打ち止められている。「反知性主義」概念にそのような用法がみられることは、概念の意味の希薄化を表すとも捉えられる。

#### 4-2. 「反知性主義」を知への「蔑視」として理解する用法

本節では、「反知性主義」概念を用いて知への「蔑視」を捉える用法を取りあげる。

竹内氏がこの概念に注目したきっかけは、いわゆる橋下現象だった。「橋下市長は学者たちを『本を読んでいるだけの、現場を知らない役立たず』と口汚くのの



した。ヘイトスピーチだったと思うが、有権者にはアピールした」  
なぜ、反知性主義が強く現れてきたのか。「大衆社会化が進み、ポピュリズムが広がってきたためだろう。ポピュリズムの政治とは、大衆の『感情』をあおるものだからだ」（『朝日新聞』2014.2.19 朝刊）

ここ数年、ポピュリズム（大衆迎合主義）の潮流の中で、知的権威やエリートを蔑視する反知性主義が盛り上がった。トランプ氏の大統領当選はその頂点を画した。

しかし5月に登場したマクロン大統領は古典文学などの趣味を嫌みなく示してきた。ある意味、マクロン大統領夫妻は反知性主義に対する反証を体現し、EUの安定に良き作用を与えている。米バージニア州の白人至上主義団体の騒ぎを見る時、反知性主義が高揚する米国との対照に目が行くのだ。（『毎日新聞』2017.08.18 朝刊）

1つ目の資料では、大阪市の橋下市長の学者を「ののしる」行為を「反知性主義」の事例として提起し、感情をあおる「ポピュリズム」の広がりであると説明している。2つ目の資料では「ポピュリズム」の潮流、「反知性主義」の盛り上がりの現れとして「エリート」を「蔑視」するトランプ氏の当選を伝えている。これらの資料ではともに、「ポピュリズム」が「エリート」や「学者」に対する「大衆」の「蔑視」をあおるものであることが、「反知性主義」と結びつけて捉えられている。「反知性主義」的な感情の向けられる先は、「知的権威」「エリート」や「学者」と捉えられ、これらの概念と感情的な「反知性主義」や「ポピュリズム」といった概念が対置されている。そして、「知的権威」「エリート」や「学者」を「蔑視」するべきではないという規範のもと、「大衆」に「反知性主義」が広がることを危惧する捉え方がされている。「反知性主義」概念は、「ポピュリズム」という政治の動きが「知的権威」への「大衆」の反発感情を煽ることの危うさを指摘するために用いられている。

#### 4-3. 「反知性主義」を他者との「対話」を阻害する傾向として理解する用法

本節では、前項の議論と同様に「感情」を切り口に「反知性主義」を捉えながらも、その危険性を「対話」や「議論」の阻害において捉える用法を取りあげる。

『歴代首相の言語力を診断する』（研究社）の著者で、社会言語学が専門の立命館大・東照二教授はこう指摘する。「首相や国会議員は、言論の自由の確保を考えるべき非常に重い立場にもかかわらず、感情のままに行動しています。議論の姿がなくなり、いわゆる“反知性主義”が政権に蔓延っています。」

国民の言論の自由を守るべき権力者たちが、言論を抑圧する<sup>11</sup>“言論の自由”を掲げる。東教授は、これが本当に民主主義国なのか、と疑問を呈するのだ。

（毎日新聞出版編 2015, p. 22）

NHK 内部は今、物事の筋道や手続きを軽んじ、トップに反発するものを押しつぶそうと言う「反知性主義」に冒されているとみられても、仕方がない状況にあります。本来ならば「不偏不党」を体現すべきNHK会長の地位が、それと正反対の人物に乗っ取られてしまっている。動揺し、苦しんでいる職員がたくさんいるのです。

（中略）

反知性主義の人物の特徴は、「話し合いや議論では自分は勝てない」と自覚しているので、「俺は絶対に正しい」と強弁し、人の意見を聞かず、不都合になると怒り出すこと。榎井会長は、この全てに当てはまる。（講談社編 2015, pp. 61-3）

1つ目の資料では、政治家の「感情のまま行動」し「議論」をしない態度を「反知性主義」であると捉え、政治家が「権力」により「言論の自由を抑圧」している点で「民主主義」が危ぶまれていると指摘している。同様の論理は2つ目の資料において、「議論」をせず自らの意見を「強弁」し、人の意見を聞かないという人物を「反知性主義」であると捉えている点にも見出せる。この用法においては、人の意見を聞き「議論」することと、「対話」を拒み、自分に反発する意見を「抑圧」することが対置されている。この捉え方においては、反知性主義者が権力を持つことで、その権力の影響下にいる人々が反知性主義者の自分勝手に感情的な行為の悪影響を受けると捉えられている。そして、人の意見を聞き「議論」することが望ましいという規範を前提に、権力を握る者が他者との「議論」「対話」を拒み自分に反発する意見を「抑圧」すること、自身の「感情」のままに行為することを「反知性主義」概念を用いて批判している。

11 ここでいう「言論を抑圧する」とは、自民党の議員による勉強会「文化芸術懇話会」において、参加した議員に「政策に反対する議員は懲らしめるべき」という旨の発言がみられたことを受けて、報道の自由の侵害を危惧した文脈で記されたものである。

## 4-4. 「反知性主義」を用いた批判に対して再批判する用法

本論文ではこれまで「反知性主義」概念の具体的な用法について検討してきたが、「反知性主義」概念を用いた議論自体に疑義を挟む用法も存在している。本節ではそのような用法を取り上げる。

編集者：この頃よく使われる、この「反知性主義」という言葉に何か意味があるんですかね。

女史：「反知性主義」は安倍政権批判のための用語になっているよね。「知性」とか「主義」とか立派な言葉を使っているけど、深い意味なんか無いんじゃない。ただの悪口。「ばかだ」「右翼だ」とか行っちゃうと罵詈雑言だけど、「反知性主義に陥る」というと、もっともらしく聞こえるじゃん。(中略)

教授：彼(池内恵氏)はいいことを書いていますね。「世に出る『反知性主義』関連本」の著者はというと、どう考えてもまさに反知性主義者そのもの」「反知性主義に陥りたくなければまず、声高に他人を「反知性主義」と罵っているような人々の名前が出た本は読まない、というところから始めるというのが鉄則」・・・まさにその通り。相手に「反知性主義」とレッテルを貼って頭から否定すれば、主張の内容がどんなものでも耳に入らないから、議論にならない。まさに反知性主義的な態度ですね。(産経新聞社 2015, pp. 380-2. 「女史」「教授」は匿名である)

この資料では、「反知性主義」は安倍政権批判のための「深い意味のない」「ただの悪口」であると捉えられている。特に「深い意味のない」ことと、「立派な言葉」を使っていることが対比され、「立派な言葉」を使い「もっともらしさ」を作り出すことが空虚であると指摘する用法となっている。「立派な言葉」を使うことで隠蔽されているのは「ばかだ」「右翼だ」といった言葉にも共通する、「声高に」人々を「罵る」性質であるという。ここでは、「反知性主義」の「意味のなさ」が、相手を「頭から否定」する「レッテル」であるという捉え方と結びついている。そして、「反知性主義」概念の「悪口」のような性質により、主張の内容が「耳に入らなく」なり、「議論にならなく」になってしまう点を「反知性主義」であると批判する用法につながっている。この捉え方において、相手を否定せず意味のある言葉で議論することが望ましいという規範を前提に、相手を「意味のない」言葉で否定すること(つまり「反知性主義」概念を用いること)が「反知性主義」概念を用いて批判されている。

## 5. 結論

### 5-1. 各章の分析の整理

第3章では、「反知性主義」概念の定着の契機を作った論者の用法について検討を行った。「反知性主義」概念は、斎藤の用法においては理論や知的な理解を過度に軽視することへの批判に、佐藤の用法においては実証的、客観的な討論を行わないことへの批判にそれぞれ用いられていた。他者に大きな影響を与える立場にあり理論的な検討、客観的な討論を行うべき人物が、その規範とは反対の信条を持つことの危険性が「反知性主義」概念により批判的に捉えられていた。

第4章では、「反知性主義」概念が定着していった際にみられた特徴的な用法を取り上げ、検討を行なった。そして、「反知性主義」概念を用いて知の運用のされ方が危うい社会状況であると理解しそれ以上の検討を打ち止める用法(4-1)、「ポピュリズム」が「知的権威」への「大衆」の反発感情を煽ることの危うさを指摘する用法(4-2)、権力を握る者が他者との「議論」「対話」を拒み自分に反発する意見を「抑圧」し「感情」のままに行為することを批判する用法(4-3)、相手を「意味のない」「レッテル」で否定するという「反知性主義」概念の用法自体を批判する用法(4-4)を明らかにした。

「反知性主義」の用法は、特定の個人、特に権力を持ち他者に大きな影響を与える人物を捉えるものと、よりマクロな「社会」の状況に対して用いられるものがあった。前者については、主に教育や政治といった「知性的」であることが求められる領域の主導者が、「知性的」でない振る舞いをする事で周囲に悪影響を及ぼすことへの批判に対して用いられていた。具体的には、物事の知的な理解を過度に軽視することの他に、議論の相手の話を聞かず感情的に抑圧するという振る舞いに対しても、「反知性主義」概念を用いた批判が行われていた。

このような「反知性主義」概念の用法は、特に政治家への批判の用法を媒介によりマクロな「社会」の状況に対する用法へと接続したと考えられる。マクロな「社会」の状況に対する用法は、社会における「知」のあり方が危機的であるという主張を展開するための社会表象として用いられていた。「反知性主義」概念を生み出したホフスタッターの用法と比較すると、ともに社会のマクロ的な状況への批判に用いている点は共通している。しかし、ホフスタッターがアメリカの「反知性主義」を、宗教的背景を基盤とする文化的なものとして捉える<sup>12</sup>一方、日本での用法においては「ポピ

12 ホフスタッターの書籍にも「反知性主義」的な政治家の描写は多くみられるが、あくまで

ユリズム」概念とも結びつき政治主導者によって伝播するものとして捉えられている。

## 5-2. 本研究の分析から得られる示唆

本節では、ここまでの分析から見出される知へのまなざしの形について考察することで、本研究の問いに答える。本研究で取り上げた「反知性主義」概念の用法に共通しているのは、「反知性主義」は知的でない対象を批判するために用いられていることである。そしてこれらの用法は（「反知性主義」概念の用法を批判する4-4の用法であっても）、知的であるべきという規範を前提としている。知的であるべきという規範は、本研究で「反知性主義」概念により作られていたような、知的でないときされる人々を逸脱として捉えるまなざしを作り出す。このまなざしは、本研究の分析から見出された「知性的」なあり方とは対立する力学を持つものと考えられる。その対立は、「知的であるべき」という規範を運用する人がまさに「知的でない」人である、という矛盾した状態を引き起こす可能性がある<sup>13</sup>。

この対立を解消する手立てとして考えられるのは、「知的であるべき」という規範の適応範囲を限定することである。例えば3-2の用法においては、政治的決定への影響力が強い政治エリートに対象が限定され、「知的である」ことの内容も客観的・実証的な議論を行い、自分とは異なる意見にも耳を傾けること、と定義されていた。しかし、概念が日常概念として運用されることは、概念の厳格な運用が行われず、意味が拡散・希薄化していくことでもある。本研究の分析においても、「知的であること」は正しい知識や情報の運用に価値を置き重んじることだけでなく、異なる他者の意見を聞くこと、感情的にならないこと、対話を重んじることといった広い範囲で捉えられていた。したがって、規範の適応範囲を限定することは、汎用的な解決策とは考えにくい。この対立の日常実践への現れ方やその解決法については、今後の研究において取り組まれるべき課題であると提起するに留める。

意見の異なる他者と対立する際には、今回「反知性主義」概念によって作られていたような、相手を「知的でない」とするまなざしにより認識しやすいと考えられる。しかし、そのようなまなざしにより相手を認識することは、「知的であるべき」規範

---

「反知性主義」を扇動するというより、人々の間に存在する「反知性主義」を利用するという描き方がなされている。

13 この矛盾を指摘したのが、4-4の用法であるといえる。ただし、批判の際に「反知性主義」概念を用いてしまったことで、批判者自らもまた同じ矛盾を抱えることになっている。



からの逸脱として相手を認識することでもあり、それはさらに対立を激化させる作用を持つ。このような知へのまなぎしの形を前提としたコミュニケーションの設計が、各領域で求められるといえよう。

## 参考文献

- 福間良明. 2017. 『「働く青年」と教養の戦後史——「人生雑誌」と読者のゆくえ』 筑摩書房.
- 木村忠正. 2020. 「マスメディア社会からポリメディア社会へ——ポリメディア社会におけるエコーチェンバー」『マス・コミュニケーション研究』第97巻, pp. 65-84.
- 小宮友根. 2017. 「構築主義と概念分析の社会学」『社会学評論』第68巻(第1号), pp. 134-149.
- Lee McIntyre. 2018. *Post-truth*. Mit Press. (= 2020. 大橋完太郎・居村匠・大崎智史・西橋卓也訳『ポストトゥルース』人文書院).
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編. 2007. 『エスノメソドロジー——人びとの実践から学ぶ』新曜社.
- 前田泰樹. 2015. 「『社会学的記述』再考」『一橋社会科学』第7巻(別冊), pp. 39-60.
- 牧野智和. 2012. 『自己啓発の時代——「自己」の文化社会学的探求』勁草書房.
- . 2015. 「『実務インテリ』から今日的自己啓発へ——『中央公論経営問題』『Will』の分析」『現代思想』第43巻(第6号), pp. 167-183.
- 間山広朗. 2002. 「概念分析としての言説分析——『いじめ自殺』の<根絶=解消>へ向けて」『教育社会学研究』第70巻, pp. 145-163.
- 森本あんり. 2015. 『反知性主義：アメリカが生んだ「熱病」の正体』新潮社.
- 西阪仰. 1996. 「差別の語法——『問題』の相互行為的達成」栗原彬編『講座 差別の社会学 第1巻 差別の社会理論』弘文堂, pp. 61-76.
- . 2001. 『心と行為——エスノメソドロジーの視点』岩波書店.
- 大石裕. 2019. 「フェイクニュースとジャーナリズム論」『法學研究：法律・政治・社会』第92巻, pp. 1-16.
- OxfordLanguages. 2016. Word of The Year. 2016. <https://languages.oup.com/word-of-the-year/2016/>. (Accessed January 26, 2021).
- Paliser, E.. 2011. *The Filter Bubble: What the Internet is Hiding from You*, New York: Penguin Books. (= 2012. 井口耕二訳『閉じこもるインターネット——グーグル・

- パーソナライズ・民主主義』早川書房)。
- Richard Hofstadter. 1963. *Anti-Intellectualism in American Life*. New York: Alfred A. Knopf, Inc. (= 2003. 田村哲夫訳『アメリカの反知性主義』みすず書房)。
- 酒井信一郎. 2010. 「メディア・テキストのネットワークにおける成員カテゴリー化の実践」『マス・コミュニケーション研究』第77巻, pp. 243-259.
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生. 2009. 『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版。
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編. 2016. 『概念分析の社会学2——実践の社会的論理』ナカニシヤ出版。
- Sunstein, Cass R.. 2001. Republic. com. Princeton University Department & Archaeology. (= 2003. 石川幸憲訳『インターネットは民主主義の敵か』朝日新聞社)。
- 竹内洋. 2003. 『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社。
- . 2014. 「序論」竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌——教養メディアの盛衰』創元社, pp. 1-17.
- 谷原吏. 2020a. 「サラリーマン雑誌の<中間性>——1980年代における知の編成の変容」『マス・コミュニケーション研究』第97巻, pp. 105-123.
- . 2020b. 「修養主義から心理主義へ——1980年代以降のビジネス雑誌が語る上昇アスピレーション」『年報社会学論集』第33号, pp. 97-108.
- 筒井清忠. 2009. 『日本型「教養」の運命——歴史社会学的考察』岩波書店。

## 参考資料

- 『朝日新聞』2014.2.19 朝刊「(探)『反知性主義』への警鐘 相次ぐ政治的問題発言で議論」。
- 『朝日新聞』2014.11.30 朝刊「(私が問う 2014衆院選) 佐藤優さん 都合よく理解、批判は切り捨て/東京都」。
- 『朝日新聞』2019.2.19 朝刊「はがき通信」。
- 笠井潔・白井聡. 2014. 『日本劣化論』筑摩書房。
- 講談社編. 2015. 「スクープ NHK人気番組『クローズアップ現代』3月で打ち切り決定! 前経営委員長代行・上村達男『NHKは反知性主義に乗っ取られた』※榎井勝人会長の言動を批判」『週刊現代』2015年11/14号, pp. 60-63.
- 『毎日新聞』2017.08.18 朝刊「金言: 反知性主義への反証=西川恵」。

- 毎日新聞出版編．2015.「安倍政権の『暴言』『妄言』が止まらない！背筋が寒くなる『反知性主義政権』本誌が選んだ『ワースト暴言』大賞は？」『サンデー毎日』2015年7月19日号, pp. 22-24.
- 森本あんり・中山俊宏．2015.「アメリカの鬱屈 混迷する大統領選 トランプ現象が仄めかす『反知性主義』の危うい未来」『中央公論』第129巻, pp. 36-43.
- 斎藤環．2012.『世界が土曜の夜の夢なら——ヤンキーと精神分析』角川書店．  
———. 2014.『ヤンキー化する日本』角川書店．
- 佐藤優．2015.『知性とは何か』祥伝社．  
『読売新聞』2015.12.20 朝刊「[読書情報] 12月20日」．
- 産経新聞社．2015.「メディア裏通信簿 16回 どっちが反知性主義？ただ安倍の悪口を言いたいだけの知識人」『正論』2015年8月号, pp. 380-389.